

笑ってごらん

第 622 号 H. 30. 5. 8 発行

～今日の格言～

人生には恐れるべきものは何もない。
理解しさえすればいいのだ。

(キュリー夫人)



大型連休が終わり、昨日から平常の流れに戻った。何かと慌ただしかった世の中の喧噪から解放され、一息ついたというところであろうか。

2 日 (水)、吹上浜砂の祭典前夜祭が予定通り行われ出席した。

前日から激しい風雨に見舞われたため、案の定、一部砂像が崩れる被害があったのだそうだ。オープン初日 (3 日) は朝 6 時から修復作業を行い、開場に間に合わせる、と言っていた。

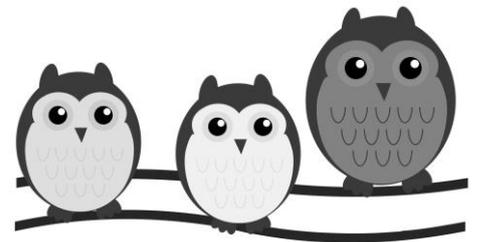
翌 3 日からは好天に恵まれ、多くの観光客が来場したという。恐竜や明治維新を題材にした砂像群が



連休中、ラジオを聴いていたら、興味深い話題があった。それは新幹線の騒音対策について。

1990 年、JR 西日本で最高速度 300km/h を目指す新型新幹線 500 系の開発が行われようとしていた。

高速走行実験を繰り返す中で空気との衝突が原因で起こる騒音が問題となった。新幹線の動力は電気。当然電線からパンタグラフを介して電気を供給しなければならない。この出っ張りは、高速になるほど空気抵抗を増し、騒音の原因となる空気の渦を発生させる。



開発者は鳥の中でフクロウが一番静かに飛ぶことを友人から聴いた。調べてみると、フクロウの風切り羽

根には独特なノコギリ状のギザギザがあり、これが空気を拡散し、静かな飛行を実現していることがわかった。そこで、新幹線のパンタグラフにギザギザを付け、30%の騒音削減に成功したという。

また、新幹線がトンネルを出る時に大きな音が出る「トンネルドン現象」を回避するため参考にしたのが、カワセミ。カワセミは餌を取るために水中に飛び込むが、水しぶきがとても小さい。研究すると、カワセミのくちばしは最も空気抵抗が小さい形をしていることがわかった。そこで、1996 年、先端の長い新幹線が開発され、トンネルドン現象は克服されたという。

こんなに技術が進歩した現代であっても、課題は尽きない。一見関係なさそうなところに大きなヒントが隠されていることを示すいい事例である。幅広く情報収集に努めよう！

先月 30 日、看護学科基礎課程 2 年生の戴帽式が行われ、214 名が純白の帽子を戴いた。

戴帽生代表：中上ままるさんは謝辞の中で二人のお母さんへの思いを述べ、会場は感動と拍手の渦に包まれた。

体育館入口にガラスケースに納められたナイチンゲール像があったのに気付いただろうか？ かつて在学中に志半ば病気で亡くなった生徒がおり、その生徒のお母さんが贈ってくださったものだ。

『心いつも 陽だまりのように あたかく 千春』と刻まれている。